

## ○プロローグ

イボ地藏いぼじぞうワシは 安曇川町あつむがわちやうに 古くから伝わる イボ地藏いぼじぞうじゃ。安曇川町あつむがわちやうは 琵琶湖びわこと 比良山ひらさんに はさまれた 自然しぜんが ゆた

かな ところじゃ。

安曇川町あつむがわちやう という 名なは 町まちの北きたを 安曇川あつむがわが 流ながれとる こ

とから ついたんじゃ。

このあたりは 安曇川あつむがわの 流ながれが

急に ゆるやかに なったっての

う 台風たいふうが 来くるたびに なんども こう水ずいに おそわれたん

じゃ。

なかでも 昭和二十八年しやうわにじゅうはちねん いまから およそ 五十年前ごじゅうねんまえにやってきた 台風十三号たいふうじゅうさんごうは とても おそろしい 台風たいふうじゃつ

た。

(間をおく)

演出ノート

静かな語り  
(やさしく語りか  
けるように)しんみりと  
ちよつとこわさを  
演出するように〔五十年〕は演じ  
るときによつてか  
えてください)

## 「第一部」安曇川決かい

※第一部は当時、消防団員であった杉本儀兵衛さんのお話に基づいて書かれています。

演出ノート

語り部 そのころ 私は まだ 二十歳  
 そこそこの 若い 消防団員  
 でした。

若々しく。  
 しかし、落ちついた口調で

(間をおく)

前の 日のお昼ごろから は

回想するように

げしく ふりつづく 雨で 安曇川の 水は あふれん ばかり。

ものすごい いきおいで 流れ

て おりました。

朝の 九時に 消防団に 出動

命令が 出て 安曇川に かけ

つけた ときには もう てい

ぼうに 積みあげた 土嚢を

こえる くらいに どんどん

水かさか ふえて いました。

「土嚢」とは土をつめた袋で、堤防などに積んで水害を防ぐために使う。安曇川町では、当時は袋に米俵を使っていたので「土俵」と呼んでいた。





語り部

いまにも あふれそうな いき  
おいの 水。

いっしょうけんめい 土嚢を  
積みましたが そのうち 土嚢

につめる 小石も 赤土も

なくなつて しまいました。

水かさは ますます ふえる

ばかり。

夕がたには 消防団長が

「この ていぼうは もたん

わ! みんな 家に 帰つて

家族を 守れ!」

と 命令しました。

演出ノート

強い口調で



語り部

なかま 四人と 急いで 家に  
帰る とちゅうのこと。

小橋の ところに やってくる

と 土嚢を とめてあった 杭

が かたむいて いまにも 土

嚢が くずれそうに なって

いました。

「おい、こりやあかんで！」

一人が そう いうと みんな

むちゅうで 土嚢を おしはじ

めました。

でも 足もとの 土が えぐら

れて ゴロゴロと 流れだしま

す。

「ああ こりや もう あぶな

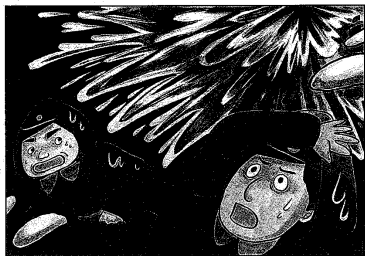
いわあ！」

と 逃げだした とたん：

(さつとヌク)

演出ノート

緊張感を出す。  
会話はそれぞれの  
人物になりきって



語り部

ドーンツ!

ついに ていぼうが 切れて  
しまいました。

ドドドドドーンツ!

山のように 水が あふれだし  
みんなに おそいかかって き  
ました。

「うわっー!」

「ていぼうが 切れたーっ!」

ていぼうが 切れたぞーっ!  
みんな おそいかかる 水から  
にげようと けんめいに かけ  
だしました。

(間をおく)

演出ノート

臨場感を出す

恐怖と緊張にから  
れた声



語り部

命<sup>いのち</sup>からがら やつどの 思<sup>おも</sup>いで  
 大水<sup>おおみず</sup>から にげだして 区<sup>くちよう</sup>長<sup>ちょう</sup>さ  
 んと いっしよに 急<sup>いそ</sup>いで 家<sup>いえ</sup>  
 に 帰<sup>かえ</sup>ろうとしたとき——  
 水<sup>みず</sup>に 流<sup>なが</sup>されて いく 一<sup>いっ</sup>けん  
 の 家<sup>いえ</sup>が 目<sup>め</sup>に とまりました。  
 わらぶきの その家<sup>いえ</sup>は 流<sup>なが</sup>され  
 ては なにかに ひっかかって  
 止<sup>と</sup>まり また 流<sup>なが</sup>されては な  
 にかに ひっかかって 止<sup>と</sup>まっ  
 て いました。

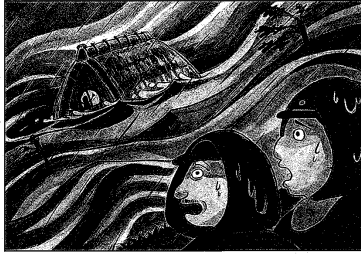
(間をおく)

よーく見<sup>み</sup>ると 二<sup>にかい</sup>階<sup>かい</sup>から カン  
 テラの 灯<sup>あか</sup>りが 見<sup>み</sup>えるでは  
 ありませんか。

(ゆっくりとヌク)

演出ノート

少しゆっくりと



語り部

「ああ まだ カンテラが 光  
つとる 助けを よんどるん  
や！」

どうにかならんのやるか…」

(間をおく)

しかし 一面が 川のようにな  
り 国道を 横切って いきお  
い よく 流れる 水に どう  
することもできません。

しばらく ぼうぜんと 区長さ  
んと 二人で 見て おりまし  
たが：

(間をおく)

演出ノート

区長の声  
ふるえる涙声

途方にくれるようす



語り部

やがて 家は ゆっくりと 下  
 流に 向かって 流れ だしま  
 した。

そして ついに 灯りが 見え  
 なくなつて しまいました。

(間をおく)

「全めつやーっ！」

(間をおく)

まっ暗な なかで 風と 雨と  
 水の ぶきみな 音が あたり  
 一面を おおっていました。

(静寂・第二部への暗転)

演出ノート

静かな口調

区長の絶望的な  
 叫び声



# 「第二部」 だく流(大水)にのまれて

※第二部は台風十三号で被災した白井豊七さんのお話に基づいて書かれています。

演出ノート

語り部

ていぼうの 土囊積みの 手伝  
いに 出ていた 私は 安曇川  
が 決かいするや

第一部と声色を変えて

「そうや 家の もんに 早う  
知らせんと！」

家に 向かって いちもくさん  
に かけだしました。

家に 帰りつくと ていぼうが  
切れたことを 知らない おな

ごたちが たき出しの じゅん  
びに おおわらわ。

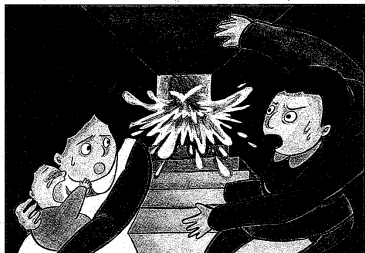
「そんなこと してたら あか

血相変えて叫ぶ

ん！」

(さつとヌク)





語り部

と さげんで みんなを 二階にかいに  
 に あげるや 間まなしに ダー  
 ツと 家いえのなかに 水みずが 流ながれ  
 こんで きました。  
 水みずは みんなが にげた 二階にかい  
 に 向むかって どんどん 上あが  
 って きます。  
 そのうちに 家いえが グラグラと  
 ゆれ はじめました。

演出ノート

臨場感を出して



語り部

「もう くら あかん」

そう 思おも(つ)て まどガラス  
が われんように 打ちつけて  
あった 板いたを バーツと はず  
しまどを わって ひさしに  
出でました。

そして 水みずが 上あがって くる  
のと 競争きょうそうする ように 屋根やね  
に かけ上あがりました。

(少し間をおく)

みんなの ぶじな すがたを

見みて 一安心ひとあんしん：

そう 思おもったのも つかの間まの  
こと。

そうこう しているうちに ザ  
ーッと 家いえもろとも 流ながされて  
しまったのです。

演出ノート

次の出来事を  
予感させる口調



語り部

そのとき 私には 三さいと  
一さいの 子どもが おりまし  
た。

子どもたちは おそろしくて  
おそろしくて ギャーギャー  
泣いている ばかりでした。

(少し間をおく)

そして その 一さいの子が  
だく流に 流されて しまった  
のです。

あっ という間の ことでした。  
私には そばにいた 上の子  
の手を つかむのが やつと  
のこと。

下の 子は どうする ことも  
できません でした。

ダーツと 流されて しても：  
あたりは うす暗う なって  
なんにも わからんし：

演出ノート

亡くなった子を  
いつくしむように

必死の様相を表現

自戒するように



語り部

なが  
流される ままに なが  
流されてい  
ると 上<sup>かみ</sup>てから 大き<sup>おお</sup>な クリ  
の 木<sup>き</sup>が 流<sup>なが</sup>れて きました。  
それに つかまって 流<sup>なが</sup>れてい  
ると うち<sup>うち</sup>の 家内<sup>かない</sup>も 流<sup>なが</sup>され  
て きて いっしょに クリの  
木<sup>き</sup>に つかまって いました。  
父<sup>ちち</sup>や 母<sup>はは</sup>とは 別<sup>べつ</sup>べつになり  
もう これは あかんと 思<sup>おも</sup>  
(つ) てたら 助<sup>たす</sup>かってました。

演出ノート

静かに思い出す  
ように



語り部

この 台風で 十四人が なく  
なったんや そ(う)やけど  
いっぺんには 見つかり ませ  
んでした。

ドロの 中に うまった 人や  
ら…  
材木の 中に うまった 人や

消防の 人らが いっしょうけ  
んめい さがして くれて ぼ  
ちぼち 見つかりました。

それも ドロまみれで だれが  
だれやら よう わからん ほ  
どでした。

ついに 見つからず じまいの  
人も おりました。

(少し間をおく)

演出ノート

沈痛な語り口調



語り部

わたしの 下の 小さな子も  
 半月ほどして 見つかりました。  
 むごたらしい すがたに なっ  
 て 近くの くわ畑に 横たわ  
 っ て おりました。

しんみりと

(少し間をおく)

泣く泣く 家内と いっしょに  
 小さな はかを こさ(こしら)  
 えて やりました。

(静寂・第三部への暗転)

演出ノート

「第三部」復興、そして水害への心がまえ

イボ地藏

そうじゃったのう。

ワシは 昭和二十八年に 町

を おそった 台風十三号の

ことも よーう 知つとる。

あれから もう 五十年…

町は すっかり 変わって し

もうた。

(少し間をおく)

こわれた ていぼうも 新らし

ゆう なった。

流された 橋も りっぱにな

った。

ドロを かぶって 使いもんにな

ならんかった 田んぼや 畑も

いまでは ようけの 米やら

ごつい 大根も とれる よう

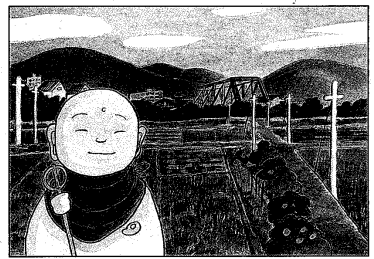
になつた。

用水路も せつせと 田畑に

水を 引いとる。

変わらんのは このワシ――

「イボ地藏」 だけじゃ。



イボ地藏の語り

感慨深げに

希望に満ちた口調





イボ地蔵いぼじぞう

でもな なんも せんで こう  
 なった わけや ない。  
 悲しかなしゅうて 苦しくるしゅうて しょ  
 うがない ときに みんなで  
ちから力を あわせて ていぼうを  
 直なおしたり 新あたしい 橋はしを かけた  
 り ドロに うまった 田たんぼ  
 やら 畑はたけの ドロを とつて  
 たがやして 用ようすい水路も 手直てなおし  
 したんじゃ：

(少し間をおく)

それは それは たいへんな  
 苦くろ勞が あったんじや。  
 みんな もとの 安曇川町あどがわちように  
いちにち一日も 早はやう もどそうと い  
 っしょうけんめいに 働はたらいたん  
 じゃ。

演出ノート

説得するように

力を込めて



イボ地蔵

で いまでも そんときのこと  
 を わすれまいと じじも  
 ばばも おとうも おかあも  
 子どもも みんなで「二八水」  
 っちゅうて 語り っいどるん  
 じゃ。  
 小学校では 「安曇川博物館」  
 ちゅう もよおし なんぞして  
 みんなで 安曇川の 安全に  
 ついて 考えたりも したる。



イボ地蔵いぼじぞう

りっぱな 「防災ステーション」  
 たら ゆうもん まで できと  
 る。

台風たいふうやら 地じしんやらに そな  
 えて 発電機はつでんきやら 食たべもんや  
 ら 飲のみみ水を たくわえとるん  
 じゃ。

よほど 「二八水にじゅうはつすい」が おそろ  
 しかったん じゃろうなー。

このお話は、当時、消防団員であった杉本儀兵衛さんと「二八水」で被災された白井豊七さんの証言に基づいて書かれたものです。

お二人のお話をお聞きするにあたっては、京都精華大学環境ソリューション研究機構調査員（小坂育子・北井香・市川恭世）の協力を得ました。

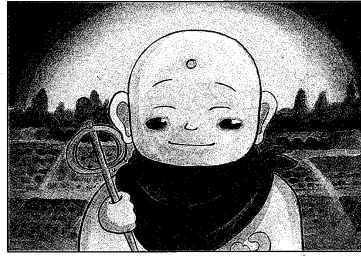
国土交通省淀川河川事務所

## おそろしい台風

2007年3月印刷発行 ©20画面・不許複製

\*

発行 国土交通省淀川河川事務所  
 制作 京都精華大学  
 協力 作画 河合垂寿香  
 印刷 西湖堂印刷株式会社



イボ地藏

これは 安曇川町の お話じゃ。  
 けどな 安曇川町 だけの話  
 やない。  
 みんなの 住んでる 町でも い  
 つ 起こっても ふしぎじゃ  
 ないんじや。  
 台風やら 水害に そなえて  
 ごっつい ていぼうを こさえ  
 たり 水を たくわえたりする  
 ところを つくったり いろん  
 なことを しとるんじやが や  
 っぱり 大事なんは  
 「自分の 命は 自分で 守る」  
 「みんなの 町は みんなで  
 守る」 っちゅう 気持ち じゃ。  
 そやから みんなで 台風やら  
 水害の ことを 考えて 「い  
 ざ」 っちゅう ときの ために  
 そなえる ことが かんじん  
 なんじや。

(少し間をおく)

ワシは いつでも みーんなの  
 ことを 見守っとるぞ：

演出ノート

説得するように

やさしく